駒澤大学
図書館蔵

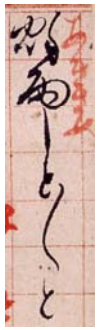
# 『たけくらべ』直筆十章一葉と文藝倶樂部直筆異同

2007. 12. 14～2009/12/15更新

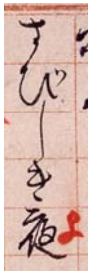
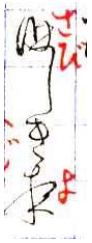
萩原　義雄

駒澤大学図書館蔵の直筆十章一葉と同じ箇所を真筆原稿とにおける樋口一葉自身異同表記している箇所についても具に指摘しておくことにしたい。

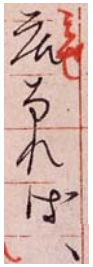
01あきさめ【秋雨】
「炆雨」と「秋雨」の直筆に「炆」と「秋」の両用字表記による異同



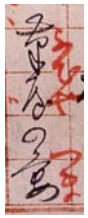
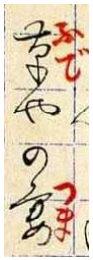
02さびし・き【淋】
「さびしき夜」と「淋しき夜」の仮名書きと漢字書きの表記異同

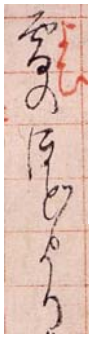
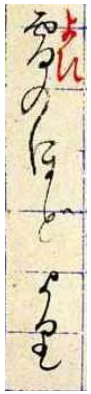
03みせ【店】
「店なれば」と「店なれば」の傍訓仮名表記「ミ」と「み」の異同



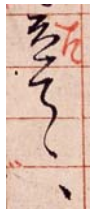
04ふでや【筆屋】
「筆屋の妻」と「筆やの妻」の仮名書きと漢字書きの異同表記

05より【O】
「より」と「よ𛀁」の仮名字母「り」と「里」の異同表記

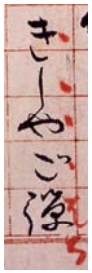



06たて【立】
「立てゝ」と「たてゝ」の仮名書きと漢字書きの異同表記

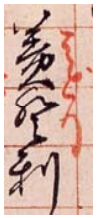


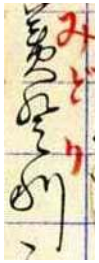
07よ・り【寄】
「寄𛀁て」と「寄りて」の仮名字母の異同表記

08きしやごはぢき【細螺弾】
「きしやご弾き」と「細螺はじき」と言ったかな表記と漢字表記の置換異同表記



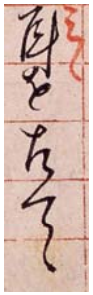
09みどり【美登利】〔人名〕
「美登利」と「美登利」の振り仮名表記「ミどり」と「みどり」の異同

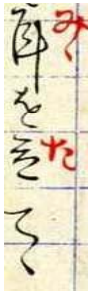




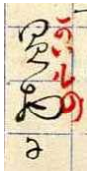
10ふと【不冨】
「不冨」と「ふと」と云った漢字表記とかな表記による異同

11みみ【耳】　を　たてて【立て】
「耳をたてゝ」と「耳を立てゝ」と云った振り仮名表記「ミゝ」と「みゝ」の異同、「たてゝ」と「立てゝ」のかな表記と漢字表記による異同

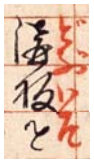




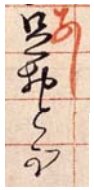
12かひもの【買物】
「買物」と「買物」と云った振り仮名表記「かひもの」と「かいもの」で仮名遣いの異同



13どぶいた【溝板】
「溝板」と「溝板」と云った振り仮名表記「どぶいた」と「とぶいた」の清濁の異同



14あしおと【足音】
「足おと」と「足音」と云ったかな表記と漢字表記による異同

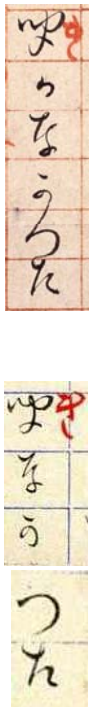


15いへば【言ば】
「言へば」と「いへば」と云った漢字表記とかな表記による異同

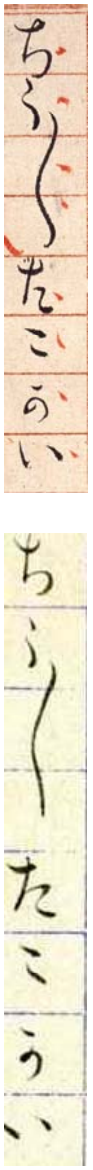
16おいら【己(等)】
「己らハ」と「己いらハ」と云った、先に墨筆で「己いらハ」と表記した為、ふりがな表記のふりがなの「い」を中途にして止める。

17ちつとも【少(共)】
「少つとも」と同じく「少つとも」の「少」ノ文字終画に「丶」を添えた表記異同

18きかなかつた【聞(無)】
「聞かなかつた」と「聞なかつた」で、後者は「か」の表記を脱落する異同



19ちう〳〵たこかい【0】
「ちう〳〵たこかい」に朱の傍点付けと「ちう〳〵たこかい」と傍点を付けない異同



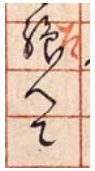
20かどなるひと【門(成)人】
「門は来たり人ハ」の「なる」の箇所五文字消去して表記と「門なる人ハ」と表記した異同。ふりがな字母「ゝ」と「か」異同、「かど」と「かと」の清濁表記異同

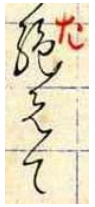
21ここ／のみせのまへまで【此店前】
「此店の前まで」のふりがな「こゝ」、ふりがな無表記「店」と「此店の前まで」の「この」、「店」と表記した異同。最終筆「で」の上に跳ね上げと次の「来」に連綿する異同

22きこえ【聞】
「聞えし」の「え」を後から添える表記と「聞えし」を連綿表記した異同

23たえて【絶】

「絶へて」と「絶えて」と云った動詞活用形仮名遣い「へ」と「え」の異同





已上、この十章末葉の文章表記における異同箇所を校合してみた結果として、上記二十三箇所の例を指摘できる。このように同じ一葉自身の手になる両本の筆遣いは、多くのことを示唆してくれているわけだが、この表記を活字化していくうえで、全集編纂者の目を相当悩ましたに相違ないであろう。ここで、注目しておきたい異同について以下にまとめておくと、

1，漢字異体字の異同　01　〔一例〕
2，漢字表記を仮名表記に置き換えた異同　04・06・　〔四例〕
3，仮名表記を漢字表記に置き換えた異同　02・08・11・14　〔四例〕
4，仮名遣いの異同〔本文〕　03・05・07・23　〔四例〕
5，仮名遣いの異同〔ふりがな〕　09・11・12・13・20　〔五例〕
6，仮名ふりがな表記と本文表記　16・18　〔二例〕
7，ふりがな異同　21　〔一例〕
8，送りがな異同　22　〔一例〕
9，朱の傍点の有無　19　〔一例〕

この九項目となる。なかでも1の古体文字と正体文字による漢字表記、2・3の漢字表記とかな表記の異同は、比較して見れば誰でもすぐに理解されようが、4・5・6・7の仮名遣いの文字表記については、余り意識されずじまいであったのではあるまいか。

## 五　結びに代えて

樋口一葉『たけくらべ』の直筆原稿を本に、活字本との文字表記の比較校合を試みたのであるが、案の定、文字については多くのことがらが浮き彫りとなってきた。「気」〔終画「丶」は省画〕文字は、活字で「氣」とすることでその文字をどのように獲得して一葉が己の書き文字としていったのか知る手がかりを失わせてしまうのである。今のところ、誰の手を模範としたのかは判定できずじまいである。また、正字「凡」「靈・霊」より俗字「凢」「灵」の文字を一葉自身、何故用いているのか。「ダルマ」を「達广」と省画表記することで活字版では、「摩」と「磨」の両用表記の揺れが発生していること。繰り返し符号を用いて表記することと文字を繰り返すことでの相違は如何なる状況化でなされているのか、その結論に辿り着くことは程遠い。さらに、漢字ふりがなの仮名遣いを見るに、口語に順って撥音通りに表記する傾向が見えて取れることが指摘できよう。これらの文字を活字化していく段階で、彼女自身少しずつ歴史的仮名遣いへと近づけようとする意識を読み取れよう。まだまだ、この種の文字表記の分析、そして調査は、活字化した文字社会のなかで置き去りになっている研究世界であるまいか。この点を踏まえ、一葉が記述した文字群は、多様な事象を提示してくれているのであるから、この資料は文字表記の考察のうえで価値の高い文献資料であるといえよう。「書道」という、文字を手習う営みが大いに尊重されていたこの明治のこの時代故に、この一葉の文字表記には、珠玉ともいえる奥深い書き手としての一葉の姿が見え隠れしている。今後、この手の書き文字が置き去りに成らないためにも、この文字の特異性についてその見通しをきっちりつけて置くことをここに提要せねばなるまい。字形を変容しても慥かに意味は大きく変わらずという見方もあろうが、時としてこうした大雑把な研究のけじめの付け方が書き手の意識を見失いがちにしているという立場にある私は、この先も作家自身の手になる直筆文献を以て、丹念にその文字表記を見据えていくこととしたい。

《参考文献資料》

※今西　実「『たけくらべ』の初出原稿について」〔「ビブリア」昭和四十二年十月刊〕
※『たけくらべ』（真筆版）大正七年・一一月、博文館刊
※『たけくらべ』（真筆版）昭和一七年一〇月、四方木書房刊
※『樋口一葉全集』第二巻〔昭和一六年七月一八日、新世社刊〕「明治三〇年六月博文館発行、大橋乙羽編・齊藤緑雨校訂・幸田露伴監修『校訂一葉集』を底本とし、更に、明治四五年五月博文館発行、『一葉全集』後編及び大正一一年六月同所発行の縮刷版を以て誤植を正す参考とした。尚『たけくらべ』に關しては、とくに大正七年十一月同所發行の眞筆版『たけくらべ』に拠ったが、仮名遣、ふり假名等はすべて他の諸編にならった。勿論、すこしでも疑はしきものは、その都度、幸田先生の高教仰いだ」〔後記、久保田万太郎〕
※『たけくらべ』（文学界・文藝倶樂部テキスト）樋口　一葉 著　中田　祝夫 解説〔1995 ¥1,260 勉誠出版〕
直筆資料
※半井桃水宛一葉書簡明治二五年八月一〇日付

《補注》

＊一葉は、麹町山下町府庁官舎で、樋口家次女として、父則義（四十三歳）、母多喜（三十九歳）、長女ふじ（十六歳）長男泉太郎（九歳）、次男虎之助（七歳）の家に誕生する。書筆の達筆さは、彼女が高等科第四級を首席で終了した頃、詠んだ歌に、「ほそけれど人の杖とも柱とも思はれにけり筆のいのち毛」は、この「筆」を題材にたものであり、今回の一葉の書記性を明らかにしていく意味でも重要な歌と言えよう。

※この資料については、本学文学部国文学研究室編「駒澤國文」第三十八号〔平成十三年二月刊〕に、駒澤大学図書館新収資料紹介『たけくらべ』（文学界版）自筆原稿と題して本学教授高田知波氏が解題及び翻刻・色彩影印資料を掲載しているので参照されたい。

※「烋」の文字は、古くは鎌倉時代の観智院本『類聚名義抄』法下13⑧に「烋古」と見え、江戸時代の井原西鶴集に用いられていることは、杉本つとむ著作撰集5『日本文字史の研究』〔八坂書房、一九九八年刊〕第七章　異体字とその史的考察249頁に採り上げている。さらに、同書で江戸中期の上田秋成『雨月物語』〔安永五年（一七七六）〕にも見えていることが指摘されている。

※「少」の文字用例一九のうち、自筆原稿『文藝倶樂部』（テキスト、勉誠出版刊）では、

①

②

③

④

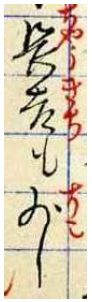
⑤

⑥

⑦

⑧

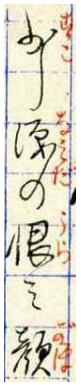
⑨

⑩

⑪

⑫

⑬

⑭

⑮


⑯

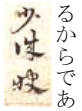
⑰

⑱

⑲

①女子の後　帯きちんとせし人少なく、〔一37⑤〕②十五の少年がませかた恐ろし、〔一37⑩〕③ひがみでは無し長　吉が負けを取る事罪は田中屋がたに少ならず、〔二40⑩〕④幻燈に、己れの　處にも少しは有るし、〔三43④〕⑤白茶金らんの丸帯少し幅の狭いを結ばせて、〔五45⑬〕⑥己れが最う少し大人に成ると質屋を出さして、〔六50⑦〕⑦友　達と思はずは口を利くも入らぬ事と美登利少し癇にさはりて、〔七52⑪〕⑧お釈迦が三味ひく世は知らず人の聞え少しは憚かられて、〔九57⑤〕⑨少しは欲　深の名にたてども人の風説に耳をかたぶけるやうな小　膽にては無く、〔九57⑭〕⑩長　吉も少しは我が遣りそこねを恥かしう思ふかして、〔十59③〕⑪己いらは少つとも聞かなかつたと正　太もちうちうたこかいの手を止めて、〔十61④〕⑫四五軒先の瓦斯燈の下を大黒傘肩にして少しうつむいて居るらしくとぼ／＼と歩む信　如の　後　かげ、〔十一61⑰〕⑬己らだつても最少し経てば大人になるのだ、〔十二62⑦〕⑭何處が好い者かと釣りらんぷの下を少し居退きて、〔十一63⑥〕⑮少し涙の恨み顔、〔十三66⑤〕⑯と顔を少し染めて笑ひながら、〔十四68⑭〕⑰と母　親怪しき笑顔をして少し経てば愈りませう、〔十五70⑥〕⑱お前みたやうのが百人中間に有たとて少とも嬉しい事は無い、〔十五70⑥〕⑲夫れは少しも　心　に止まらねども美登利が素振のくり返されて正　太は例の歌も出ず〔十六72⑩〕。といった表記の「少」の文字を確認できる。この多くは筆運びを速めているが、なかでも、⑪の表記については他に見えないしっかりとした表記体を保ち、最終画「丿」の右斜め上に「丶」を増画する文字表記となっていて、特に注目しておくべき文字表記となっているのである。ある意味でこの文字は、同一人物が書写したとは思えない感を受けるからである。赤井清美『書体字典』〔東京堂出版刊〕に依れば、528宋克（一三二七-一三八七年）の「急就章巻」（一三七〇年）に見え

る「少」



の文字に近いのである。

こうした書道の手ほどきを通して得た一葉の文字表記が見え隠れしていると見ておくことも可能であろう。